

戦時中の思い出

綾瀬市支部 山口 正子（妻）

戦没者 山口 保

戦没地 沖縄県

昭和十七年春の素晴らしい晴れの日でした。横須賀に住んでいた叔父さんが急に来られ「海老名に来たから迎えに来た。」との事、私は両親から何も聞いておらず、皆仕事で私は仕方がなく、叔父に連れられ早川から海老名迄一時間以上かけて先方に着き、夫となる人と会いました。

突然の事だったので気持ちも揺らいでいた。しかし、話がどんどん進んでいって結婚式となつてしまった。戦時中なので花嫁衣装の上からモンペをはき、防空頭巾を被つて、どのようにして、横須賀の地へ行ったか覚えがない。両親始め近所の人達が配給物を持ち寄りお赤飯や鯛や野菜で作った海苔巻と有り難い事でした。空襲警報が鳴ると暗幕をした薄暗い式の最中にも真つ白な晒しを半分に折り、千人針の作り回しがされました。それは出征する兵隊さんの弾除けのお守りとして渡されました。今日も、明日も分からない空襲の中でも防空壕掘りは続き、男も女も年老人達ばかりでした。

昭和十九年四月十六日横須賀海軍病院で無事に女の子を出産した。ようやく工廠の近くに家が

見つかり親子三人での生活が始まるうとしていた矢先、夫が帰宅する成りだまって私の手に召集令状を渡した。夫と私は唯顔を見合わせ声も出ず、私は子供を背負ったまま二人は座り込んでしまいました。三人での生活は二十四時間も有りませんでした。翌日には皆に送られ溝ノ口の連隊に入隊しました。

更に次の日、母子強制疎開の通知があり、実家しか行く所も無く早川に疎開。実家は病弱な母と父と妹、更に東京大空襲で姉も帰ってきて、三世帯での大変な生活と成りました。農協迄配給を取りに行くにも私は子供を背負い自転車で姉の分も、長い列に並びさつま芋、小麦粉、大豆など二人分合せても僅かな量でした。空襲警報と同時に戦闘機が低空飛行してくると、人が見える程だったので畑仕事も出来ず苦しい日々が続きました。

二十年八月三日、夫戦死の知らせが届き海老名の海源寺へ遺骨を取りに行き、近所総出で供養して戴きましたが、本当に悪夢を見ている様な毎日でした。八月十五日終戦の玉音放送を聴きながら言葉もなく、隣組の皆さんと声を出して泣きました。厚木基地近くに住む私達に「アメリカ兵に女、子供が殺されるから男の姿になれ」とか色々な噂が飛び交い不安な毎日が続いた。

日本全国で多くの遺児の出る中、母子会が「母子福祉協議会」として立ちあがった。国会へ陳情も代表の一人として子供を背負い参加した。正月や祭り事のある時はリヤカーに子供を乗せお惣菜を売って会費を作った。全国未亡人の歌として「生き抜く白百合」を歌いながら涙する日々……。

昭和三十五年十一月二十九日秩父宮妃殿下より御歌賜る「荒き世の風に絶えつつ手ひとつに

子を育て行く母に幸あれ」と妃殿下を身近に感じ皆で咽び泣きました。

現在は遺族会の方々のお世話になり慰霊堂に参拝し同志の方々との語らいに穏やかな日々を過ごしております。今、戦没者の妻会員は十二名ですが強い心で生き抜いています。

日本の礎とられた英霊に感謝し、戦争を知らない若い人達に戦争の悲惨さや苦しみを語り継ぎ、二度と戦争を起こしてはならない。参加してもならない事を願っております。